心理的な結びつきも，メスがリーダーシップをとったことに大きく関係しているものと思われる。

なお，この群れは1979年初頭にほぼ全個体が捕獲され，それ以降の調査は不可能となってしまった。

木曽山系に連続分布をするニホンザルの群れのグルーピング・パターンに関する比較研究

田中　進（マカク研）
村松正敏（マカク研）

木曽川左岸の上松町・大桑村一帯には，5つの野生群が生息している。それは，木曽川支流の滑川左岸の風越山北斜面に生息している群れ（Ｋｅ群），東野地区周辺に生息している群れ（Ｔ群），倉本周辺に生息している群れ（Ｋ群），上郷周辺に生息している群れ（Ｓ群）及び倉本周辺に生息している個体数の小さい群れ（Ｋs群）である。

このうち，1979年11月のＫ群の個体数及び性年齢構成は，0歳個体が16頭，1歳から3歳個体が7頭，4歳以上のメスが27頭，4歳から7歳のオスが2頭，8歳以上のオスが10頭，性年齢不明個体が26頭の合計88頭であった。4歳以上のメスに対する0歳個体の割合は，59.3%，群れの総個体数に対する0歳個体の割合は，18.2%であった。これらの値はニホンザルの群れの大きさと構成についての記録によると，箕面Ｂ群（1955年センサス）及び小豆島Ｓ群（1956年8月センサス）の値とよく似ている。また，59.3%，18.2%という値はニホンザルの野生群の中ではやや高いように思われる（増井，1976）。

また，出産・死亡については若干の資料が得られたので，次年度の報告で述べたい。

遊び行動の集団間比較研究
－勝山集団と淡路島集団について－

小山高正（阪大・人科）
小山幸子（〃・〃）
中道正之（〃・〃）

餌付け野生ニホンザル8集団の比較研究から，淡路島集団では個体関係が極めて親和的であるのに対し，勝山集団では順位関係が厳しいという相対時する結果が得られた。この集団間差異は発達段階の比較的初期から形成されていくものと考えられる。淡路島・勝山の両集団で幼体期の遊び行動および初期の母子関係に注目し当該集団の特性が個体発達の初期にどのように反映されているかを検討した。

観察は1979年6月から12月に両集団で0歳から4歳を対象として行われた。まず餌場を巡回し遊び仲間を記録し，遊び仲間がどのように形成されているかを分析した。淡路島・勝山とも，雌よりも雄が，年齢別では，1・2歳の個体が遊ぶ度合が高いという同じ結果が得られたが，遊びに参加した2個体の年齢差からみると，勝山では年齢差が広がると遊びが著しく減少するのに対し，淡路島では年齢差が2歳ぐらいまで遊び仲間をよく形成する点に差異が認められた。

8㎜フィルムに基づく遊びの行動要素の分析は現在進行中であるが，勝山では優位と劣位のサルの間でいくつかの行動的差異が見られたのに対し，淡路島ではその差は明確でなく両集団の特性が反映しているものと考えられる。

生後直後から約3ケ月までの幼体をハンセン法で追跡観察した。その結果，母子間距離は加齢に従い淡路島のほうが大きくなり母ザルから離れて広範に動くのに対し，勝山は相対的に母ザルに近接して活動する傾向が高く，さらに淡路島では幼体は成体との接触が比較的多くなり，逆に勝山では未成体との接触が多いという諸点の著しい集団差が抽出された。

両集団の相異なる集団特性は発達のかなり初期に各個体に獲得され，遊び行動を含めた幼体の行動に反映されていることが明らかとなった。

設定課題　2.

各環境構造における霊長類の適応機序の解明

志賀高原におけるニホンザルの生息環境としての森林植性

小見山　章（岐大・農）

Ⅰ　はじめに

志賀高原横湯川上流域では様々な植生型がモザイク状に分布している。今回は湖成層を含み地形が多様な本調査地において，地形と植生型の分布